

病原体遺伝子検査の現状とこれからの課題

◎磯崎 将博¹⁾

一般社団法人天草郡市医師会立 天草地域医療センター¹⁾

SARS-CoV-2 が出現してから間もなく丸 3 年が経とうとしている。この間に、大小問わず様々な医療機関に数多くの遺伝子検査関連機器が導入され、SARS-CoV-2 検査のために活用されてきた。そして今、日本におけるコロナ対応は転換期に来ており、今後は SARS-CoV-2 遺伝子検査の需要は急速に減少していくことが予想される。その時、残された遺伝子検査関連機器をどのように有効活用していくのか、そろそろ真剣に考えなければならない時期にきている。しかし、これらの機器を有効活用するにあたって、クリアしなければならないいくつかの課題がある。以下に簡単に私見を述べる。

【人材育成】

遺伝子検査に精通した臨床検査技師が非常に少ないのが現状である。新たな病原体が出現したときにすぐに対応できるような人材の育成に早急に取り掛かる必要がある。

【新規試薬の開発】

試薬メーカーに頼らざるを得ないところではあるが、我々ユーザーからも積極的に検査項目の提案をしなければならない。また、試薬検討にも可能な限り協力していく必要がある。

【保険収載】

日本国内では保険収載されている遺伝子検査は少なく、保険収載されていても算定要件の縛りが強く、実際には一般病院では算定出来ない場合が多い。各種学会を通して要件の緩和や新たな保険収載につながるような活動をしていく必要がある。

【研究用試薬・機器の活用】

遺伝子検査関連試薬・機器は比較的成本も安く抑えられ、さらに体外診断用試薬・機器では検査できない病原体や病原因子の検出にも対応できるため、実施可能な検査体制作りに取り組む必要がある。

以上のように、アフターコロナにおいて検査機器を活用していくためには、これらの課題をクリアすることが前提となる。本講演では、当院で行っている遺伝子検査の一部を紹介しながら、皆さんとアフターコロナにおける遺伝子検査機器の活用法について考えてみたい。